『高瀬舟』の真相

― 小説史上，最も読者を欺いた殺人犯 ―

柳　澤　浩　哉

A Hidden Story of "TAKASE-BUNE":

Did the Brother Really Speak with His Broken Vocal Code?

Hiroya YANAGISAWA

キーワード：『高瀬舟』，森鴎外，推理

小説史上，最も読者を欺いた犯人

日本の推理小説史上，最も多くの読者を欺いた犯人は誰だろう。

こう聞かれると，いろいろな作家や作品を思い浮かべてみたくなるが，こんな質問に答えの出せないことは，ちょっと考えてみれば分かる。しかし，質問が次のようになっていれば，私は自信を持って一人の殺人犯の名前をあげることができる。

日本の小説史上，最も多くの読者を欺いた犯人は誰か。

それは『高瀬舟』の主人公喜助である。

喜助は弟殺しの罪で遠島を言い渡された罪人であるが，憎悪や利害のために弟を殺したのではない。自殺をはかって苦しんでいた弟を楽にするために，やむなく命を奪い，殺人犯になったのだった。しかも，喜助がこの行為に及んだのは，弟自身から強く催促された結果である。喜助を護送する同心庄兵衛は，喜助からこの話を聞いて，割り切れない思いにとらわれる。〈助かる見込みのない人間を，苦痛から救うために命を奪うことは，果たして罪なのだろうか。〉

安楽死の是非は，答えの出せない重い問題である。『高瀬舟』は，日本で最初にこの問題を取り上げた小説として，揺るぎない地位を確立している。

以上は，『高瀬舟』後半部の唯一の読み方であり，これまで，この読みに異を唱える人はいなかった。

喜助の話を中心に展開するこの作品は，言うまでもなく，彼が事実を話しているという前提に立っている。では，喜助の話がでたらめだったとしたら，この作品の読み，あるいは『高瀬舟』という作品の価値はどうなるだろう。部分的な記憶違いではなく，喜助が最初からでたらめの作り話をしていたら，という仮定である。

こんなことを言うと，〈登場人物の話を信用しないのは，ナンセンスな読み方だ。〉という非難が返ってくるに違いない。しかし，誤解しないでほしい。私は，喜助を信用しないのではない。喜助の話は信用できない，と言っているのである。どんなに好意的に理解しようとしても，彼の語る〈弟殺し〉は，あり得ないことだらけ，矛盾だらけで到底信用することができないのである。ただし，彼の話は単に信用できないだけではない。その話からは，喜助による〈弟殺し〉の〈真相〉が浮かび上がってくる。それは，これまで誰も考えたことのない恐ろしいものである。

『高瀬舟』という評価の確立された作品に対してこんな大見得を切ると，失笑か顰蹙かを買ってしまいそうだが，『高瀬舟』は世間が思っているような，まともな作品ではない。この作品には喜助の話の他にも，おかしなところがいろいろとあり，たとえば，舞台設定からして既におかしい。

> いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執っていた寛政の頃ででもあっただろう。智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に，これまで類のない，珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

『高瀬舟』の物語はこのように始まる。季節は桜の頃のはずだが，舟が進む川の様子は次のように書かれている。

> その日は暮方から風が歇んで，空一面を蔽った薄い雲が，月の輪廓をかすませ，ようよう近寄って来る夏の温さが，両岸の土からも，川床の土からも，靄になって立ち昇るかと思われる夜であった。

夜桜の経験が一度でもあれば分かるが，桜の季節は，夜になると昼の暖かさが嘘のように冷え込んでくるものである。夜になって「ようよう近寄って来る夏の温さ」を感じるのは，少なくとも新緑になってからだろう。なお，「ようよう近寄って来る」とあるのだから，この晩だけがたまたま暖かかったという反論は成立しない。この時代，知恩院の桜は異常な遅咲きだったに違いない。ちなみに，京都の知恩院は今も桜の名所であるが，現在の桜が特に遅咲きということはないようだ。

もちろん，誰にでもミスはあるから，この程度で大騒ぎすべきではないと思う読者もいるかもしれない。しかし，『高瀬舟』は全編がこの調子なのである。

『高瀬舟』のあらすじ

喜助の話の検討に入る前に，『高瀬舟』の粗筋を確認しておこう。

羽田庄兵衛は，高瀬舟で罪人を護送する同心である。ある時，珍しい罪人が高瀬舟に乗ってくる。その男の名は喜助。弟殺しの罪で遠島にされるのだが，舟の上でいかにも楽しそうな表情を浮かべている。これまで，夜通し泣き明かす罪人ばかりを見てきた庄兵衛には，その姿があまりに不思議に見えた。その不思議さに，喜助に胸の内を問いただしてみると，予想もしない答えが返ってくる。

自分はこれまで骨身を惜しまず働いてきたが，金を手にしても右から左に渡るばかりで，自分の金というものを持ったことがなかった。ところが，牢では何もせずに食べさせもらった上に，島に渡るにあたって二百文の金をいただいた。自分はこの二百文を，島でする仕事の元手にしようと楽しんでいる。これが，喜助の答えである。

庄兵衛は，喜助の欲のないこと，足ることを知っていることに驚き，自分の生活と引き比べて感嘆する。さらに，弟殺しのわけを聞いてみると，これもまた意外な答えである。

ある日，喜助が仕事から戻ってみると，弟が血まみれで寝ており，見ると剃刀の刃が深々と喉に刺さっている。病気だった弟が，これ以上迷惑をかけまいとして自殺をはかったのだった。死にきれない弟は，喉に刺さった剃刀を抜いて，早く楽にしてくれと懇願する。喜助は躊躇するが，弟の「敵の顔をでも睨むような」恐ろしい目に促されて，その刃を抜いて，命を奪ったのだという。

庄兵衛は，はたしてこれが人殺しにあたるのか「どうしても解け」なくなる。お奉行の判断に従おうと思っても，どこか納得できない部分が残ってしまうのだった。

粗筋を見ればわかるように『高瀬舟』は前半と後半とで，独立する二つの主題を持っている。安楽死は後半部の主題であり，前半部の主題は「足るを知る」とか「知足」と言われる。喜助がわずかな金で満足していることに驚嘆した庄兵衛は，喜助が足ることを知っているために，際限のない欲望から解放されているのだと気づく。これが「足るを知る」と呼ばれる，前半部の主題である。

鴎外は，『高瀬舟縁起』という短いエッセーに『高瀬舟』の成立事情を書いている。そこでは，『翁草』という江戸時代の随筆集で見つけた逸話を元にして『高瀬舟』を創作したこと，創作にあたっては，最初に安楽死と知足の二つのテーマがあったことが書かれている。作品の中に「足るを知っている」という言葉が具体的に書かれていることもあり，安楽死とともに，「知足」という主題もこれまで疑われたことはない。

しかし，『高瀬舟』は後半部だけでなく，前半部にも大きな問題を抱えていて，実は，「足るを知る」というテーマも成立してはいない。

『高瀬舟』はこれ以外にも問題を抱えていて，二つの主題から離れたところにも，腑に落ちない箇所がいろいろとある。先ほど，物語のはじめに書かれた桜の〈遅咲き〉を紹介したが，この前後には，他にもおかしなところがある。

喜助の不気味さ

物語は，同心の庄兵衛が喜助を不思議に思ったところから始まる。粗筋で紹介したとおり，喜助の表情が明るすぎるのだ。喜助の表情を描写しているところを二つ抜き出してみよう。

それは喜助の顔が縦から見ても，横から見ても，いかにも楽しそうで，若し役人に対する気兼がなかったなら，口笛を吹きはじめるとか，鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

この男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗っ

たような顔をしている。

弟を殺害して島に流されようとしているのに，これほど楽しそうな様子でいられる喜助は，一体どんな人間なのだろう。この表情を不思議に思った庄兵衛が，喜助の心の内を尋ねるところから物語は始まるから，ここでは喜助の表情がおかしくないといけないのだが，それにしても彼の表情は不思議である。

〈これまで自分の金を持ったことがなかったから，二百文の金が嬉しい〉という喜助の話を聞いて，庄兵衛は彼の無欲さに驚嘆し，彼の表情に対する疑念をすっかり忘れてしまうのだが，この説明で本当に納得できるだろうか。

喜助は「口笛を吹きはじめるとか，鼻歌を歌い出すとかしそう」なくらい，あるいは「遊山船にでも乗ったような顔」に見えるほど明るい。彼は何の屈託もなく，島での生活にわくわくしているのだ。初めて手にした金がどんなに嬉しかったとしても，この喜び方は正常な感覚ではない。

事情はどうあれ，喜助は自らの手で弟の命を奪っているのである。あの血まみれの〈弟殺し〉の記憶に，彼は一体どう折り合いをつけているのだろう。しかも，弟が自殺を図った動機は，喜助を楽にするためだという。さらに，喜助と弟はただの兄弟ではない。幼い頃に両親を亡くし，これまでずっと助け合って暮らしてきた二人きりの兄弟である。常人ならば，とうてい立ち直れない衝撃だろう。しかし，喜助は，「わたしは此二百文を島でする爲事の本手にしようと樂しんでおります」と言う。これほどの衝撃を，二百文の金で綺麗に忘れてしまえる感覚は，不思議を通り越して不気味である。

そして，不気味さのとどめは「にっこり笑った」という喜助の笑顔だ。喜助の明るさを不思議に思った庄兵衛は，「喜助。お前何を思っているのか」と問いかける。突然の問いかけに，喜助は「居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺」うが，庄兵衛が質問の意図を説明すると，喜助の表情が緩む。庄兵衛の言葉の後半から引用しよう。

「（前略）己はこれまでこの舟で大勢の人を島へ送った。それは隨分いろいろな身の上の人だったが，どれもどれも島へ往くのを悲しがって，見送りに来て，一緒に舟に乗る親類のものと，夜どおし泣くに極まっていた。それにお前の様子を見れば，どうも島へ往くのを苦にしてはいないようだ。一體お前はどう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑った。「御親切に仰やつて下すつて，難有うございます。（後略）」

庄兵衛の優しい言葉で喜助が安心したことは分かる。だから，喜助の反応が〈表情が緩んだ〉程度で済んでいれば何の不思議もないのだが，「にっこり笑った」というのは解せない。無邪気な子供ならともかく，いい年をした男が「にっこり笑」うというのは，そうそうあることではない。喜助は，庄兵衛の話の何がそんなに嬉しかったのだろう。

喜助のこれらの反応は明らかに常軌を逸している。この表情を見る限り，喜助は異常な感覚の持ち主だと考えざるを得ない。しかし，言うまでもなく，『高瀬舟』は異常性格者を主人公に設定した物語ではない。それどころか，罪人ながら，その無欲さと純粋さで同心庄兵衛の目を開かせるのが，喜助の役割である。その喜助が異常な人間となれば，この作品は根底から揺らいでしまうはずだ。

喜助の異常性を確認しただけで，『高瀬舟』の価値と権威は失墜する。作品の価値を批判するだけなら，これを指摘するだけでも十分だと思うが，『高瀬舟』を批判するのに，作品の中に入らないのは，あまりにもったいない。『高瀬舟』は，批判的な目で読む面白さだけでなく，推理する楽しみを合わせ持っているからである。この作品は一見破綻しているように見えながら，驚嘆すべき〈真相〉によって見事に一貫した作品なのである。

まず，喜助の語る〈弟殺し〉から検討を始めよう。

〈弟殺し〉の場面

〈弟殺し〉に関する喜助の話は長いので，事件の核心である，血まみれの弟を発見したところから検討してみたい。その部分を引用しよう。疑いの目を持って，喜助の話を聞いてほしい。不自然なところが，いくつも見つかるはずである。

或る日いつものように何心なく帰って見ますと，弟は布団の上に突っ伏していまして，周囲は血だらけなのでございます。わたくしはびっくりいたして，手に持っていた竹の皮包や何かを，そこへおっぽり出して，傍へ往って『どうしたどうした』と申しました。すると弟は真蒼な顔の，両方の頬から臆へ掛けて血に染ったのを挙げて，わたくし

を見ましたが，物を言うことが出来ませぬ。息をいたす度に，創口でひゅうひゅうと云う音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも様子がわかりませんので，『どうしたのだい，血を吐いたのかい』と云って，傍へ寄ろうといたすと，弟は右の手を床に衝いて，少し体を起しました。左の手はしっかり臆の下の所を押えていますが，その指の間から黒血の固まりがはみ出しています。弟は目でわたくしの傍へ寄るのを留めるようにして口を利きました。ようよう物が言えるようになったのでございます。『済まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそうにもない病気だから，早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思ったのだ。笛を切ったら，すぐ死ねるだろうと思ったが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思って，力一ぱい押し込むと，横へすべってしまった。刃は蘇れはしなかったようだ。これを旨く抜いてくれたら己は死ねるだろうと思っている。物を言うのがせつなくって可けない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と云うのでございます。弟が左の手を弛めるとそこから又息が漏ります。わたくしはなんと云おうにも，声が出ませんので，黙って弟の喉の創を覗いて見ますと，なんでも右の手に剃刀を持って，横に笛を切ったが，それでは死に切れなかったので，そのまま剃刀を，剖るように深く突っ込んだものと見えます。柄がやっと二寸ばかり創口から出ています。

あまりにでたらめな話なので，まじめに批判するのが滑稽な気もするが，まじめに検討していこう。

まず，「済まない。どうぞ堪忍してくれ。……」で始まる弟の話があまりに長く，あまりに悠長である。これはどう考えても，喉に深々と剃刀の刺さっている人間の口調ではない。声を発するのさえ苦しい状態なら，話をできるだけ短くしようとするだろう。剃刀の刺さった喉を左手で喉を押さえ，うつ伏せになった体を，右手で少し起こして話すという状況を想像してほしい。（この状況で，体を起こせるのもすごいが。）この状況で「済まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそうにもない病気だから……」という前置きは，どう考えても不自然である。

彼の口調が不自然なのは前置きだけではない。「すぐ死ねるだろうと思ったが」，「物を言うのがせつなくって可けない」，「どうぞ手を借して」などという不必要な修飾節が多すぎるし，語尾は「と思ったのだ」，「しなかったようだ」といった丁寧な言い方ばかりである。弟がどんなに礼儀正しい人間だったとしても，この状況でこの言い方はないだろう。喉に剃刀を刺して苦痛に顔を歪めながら，この長く丁寧な言葉を発する様子が想像できるだろか。無理やり想像するとホラー映画のようになってしまいそうである。

ただし，何より不自然なのは，弟が笛，すなわち声帯を切り，そこに深々と剃刀の刃が刺さっていた点である。彼は，一体どこから声を出したのか。意外に思うかもしれないが，ささやき声を作るのも声帯である。声帯が動かなければ，声はもちろん，ささやき声も作れないのだ。

喜助によれば，弟は喉をおさえて声を出したそうだが，本当に声帯を損傷していたのなら，どこをどう押さえようと，声は出ないのである。仮に，声帯が動く程度の浅い傷だったとすれば，剃刀を「ずっと引」いただけで死ぬことはあるまい。

しかし，喜助の話からすると，弟は声の出せない状態で，この長い話をひと続きに話したようである。しかも，その内容がすごい。彼はこの瀕死の状態で，兄のために親切な説明を行っている。

> 刃は蘇れはしなかったようだ。これを旨く抜いてくれたら己は死ねるだろうと思っている。

この恐ろしい状況にありながら，この弟は剃刀の刃の状態を気にかけて，それを兄に伝える余裕があるらしい。自分の喉に深々と剃刀を刺さしながら，その刃の状態を気にできるとは驚異的な冷静さであるが，彼の観察力はさらに恐るべきものである。喉に刺さった剃刀が刃こぼれしていないと，彼には判断できるのだから。自分の喉に刺さった刃の状態は，一体どうやったら分かるのだろう。

もしも，本当に喜助の話した通りに弟がしゃべっていたとすれば，弟は想像を絶する忍耐力，冷静さ，精神力，そして〈発声力〉の持ち主となる。それほどの精神力や忍耐力があるのなら，兄の助けを借りなくても，喉に刺さった剃刀を自分で何とかできたのではないか，と考えるのは私だけだろうか。

ただし，引用した喜助の証言で信用できないのは，弟の言葉だけではない。弟の傷口に対する喜助の観察力も信じられない水準である。

> 黙って弟の喉の創を覗いて見ますと，なんでも右

の手に剃刀を持って，横に笛を切ったが，それでは死に切れなかったので，そのまま剃刀を，剖るように深く突っ込んだものと見えます。

この場面で「喉の創を覗いて」観察できただけでも人並み外れた冷静さだが，その内容は，剃刀の持ち方，剃刀の動き，さらに，それを動かした心理までが再現されている。しかも，この直前には次のように書かれている。（傍線は筆者。以下も同様。）

弟が<u>左の手を弛めると</u>そこから又息が漏ります。

話を止めた弟は，喉を押さえていた左手の力を抜くが，それは弛めただけである。つまり，左手は傷から離さず，傷の上に置かれたままなのだ。弟はうつぶせに寝て，傷は血に覆われ，さらに左手で隠されている。これを「覗いて見」ただけで，「右の手に剃刀を持って，横に笛を切ったが，それでは死に切れなかったので，そのまま剃刀を，剖るように深く突っ込んだものと見えます。」などという詳細な観察が，軍医でもない喜助にできるものだろうか。

自らの喉を切り裂いた時，弟は文字通り必死だったはずだ。激痛と恐怖に耐えながら，震える手に満身の力を込めて剃刀を動かしたに違いない。しかし，喜助の想像に，〈必死で〉とか〈苦痛〉といった意味の言葉は出てこない。喜助の言葉は，まるで検死官の所見のように冷静で冷たい。弟が目の前で苦しんでいるのに，喜助には，その苦しみが伝わって来ないのだ。この場所に限らず，喜助は異様なほどに〈冷静〉である。それを特に感じさせるのが次の箇所だ。

それにその目の怨めしそうなのが段々険しくなって来て，とうとう敵の顔をでも睨むような，憎々しい目になってしまいます。それを見ていて，わたくしはとうとう，これは弟の言った通にして遣らなくてはならないと思いました。わたくしは『しかたがない，抜いて遣るぞ』と申しました。<u>すると弟の目の色がからりと変って，晴やかに，さも嬉しそうになりました。</u>わたくしはなんでも一と思にしなくてはと思って膝を撞くようにして体を前へ乗り出しました。弟は衝いていた右の手を放して，今まで喉を押えていた手の肘を床に衝いて，横になりました。わたくしは剃刀の柄をしっかり握って，ずっと引きました。

ここで引っかかるのは「晴やかに，さも嬉しそうに」という表情である。絶望的な激痛の中にある弟が，喜助の「しかたがない，抜いて遣るぞ。」という言葉に安堵したことは納得できる。それまでの厳しい目つきが消え，微笑んだように見えた可能性も否定はしない。しかし，その目が果たして，「晴やかに，さも嬉しそうに」となるものだろうか。

ただし，これは弟の目ではなく，その目からこの感情を読み取った喜助の問題だろう。言うまでもなく，ここには喜助の感情が投影されている。弟の目がどのような表情を見せたとしても，わずかでも殺すことに躊躇や罪悪感があれば，「晴れやか」だの「嬉しそう」だのという気持ちを読み取れるだろうか。喜助は弟の命を奪うことを，まさに，すっきりと「晴れやかな」気持ちで決意できたのだ。計り知れない不気味さだである。

そして，剃刀を引いて弟の命を奪った時の，喜助の〈見事〉さにも引っかかる。弟の喉に深々と刺さった剃刀は，「柄がやっと二寸ばかり創口から出てい」る状態だった。二寸といえば7センチ弱だから，この短い柄を握って，喉を切りながら引き抜くことは決して簡単ではないだろう。べったりと血糊がついた7センチ弱の柄である。「剃刀の柄をしっかり握って，ずっと引きました。」というほど簡単にいくものだろうか。

血の海の中で「膝を撞くように」するだけでも抵抗があると思うが，「体を前へ乗り出」せば，傷口や血が目の前にくるだろう。傷口からもれる苦しそうな呼吸の音も大きく聞こえたはずだ。その中で，何の動揺もなしに「ずっと引きました」という喜助の手際は，〈見事〉と言うしかない。

ところで，庄兵衛から「人をあやめた」ことの「わけ」を問われた時，喜助は次のような前置きをしてから，〈弟殺し〉の詳細を話し始めている。

跡で思って見ますと，どうしてあんな事が出来たかと，自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。

しかし，喜助の語る〈弟殺し〉は細部まで詳細に記憶されていて，これ以上ない冷静さをもって〈弟殺し〉を実行していたことが伺える。喜助が最初に言った〈自分ながら不思議でなりませぬ。〉という言葉はあまりに空々しい。

〈弟殺し〉の真相

〈弟殺し〉についての喜助の証言は，あちこちに重大な疑義が見つかる。喜助は嘘を言っていると判断して間違いないだろう。

〈弟殺し〉についての喜助の証言が信用できなければ，『高瀬舟』の一方の主題である安楽死は必然的に崩れる。安楽死という真面目で重いテーマが，喜助の作り話に踊らされて出てきていた事実に，腹立たしさを覚えた読者もいるかもしれない。なんとも後味の悪い結果だが，『高瀬舟』はこれだけでは終わらない。喜助の話を詳細に検討すると，喜助が弟に何をしたのか，〈弟殺し〉の〈真相〉が浮かびあがってくるのだ。

喜助の〈弟殺し〉は，弟と二人だけの密室内で進行したために，喜助の証言以外に手がかりにできるものがない。つまり，何も手がかりがないように思えるのだが，幸いなことに，喜助の話の中には一つだけ信用できる場所がある。それは，事件の第一発見者である「近所の婆あさん」に関するところだ。彼女は，事件の第一発見者であると同時に唯一の証人だから，取り調べの中で，喜助の話は彼女の証言と照合されているはずだ。もしも，二人の証言に食い違いがあれば，喜助は厳しく追求されたに違いない。つまり，喜助の話の中で，彼女の登場するところだけは客観性を信用できるのである。そして，その中で重要な事実が語られている。その部分を引用してみよう。これは先ほどの引用の直後なので，続き方が分かるように引用してみる。

> わたくしは剃刀の柄をしっかり握って，ずっと引きました。この時わたくしの内から締めて置いた表口の戸をあけて，近所の婆あさんが這入って来ました。留守の間，弟に薬を飲ませたり何かしてくれるように，わたくしの頼んで置いた婆あさんなのでございます。もうだいぶ内のなかが暗くなっていましたから，わたくしには婆あさんがどれだけの事を見たのだかわかりませんでしたが，婆あさんはあっと云ったきり，表口をあけ放しにして置いて駆け出してしまいました。

傍線部を順番に考えて行こう。最初の傍線部で〈あっ！〉と思った読者もいると思う。〈弟殺し〉の間，表口の戸は内側から閉められていた。これを根拠に，〈喜助は内側から戸を閉めた上で弟の喉を切った〉と断定できれば決定的だが，「表口」とあるから，家には裏口もあったと考えることにする。喜助は自分たちの家を「掘立小屋同様の所」と言っている。二つの出入り口のある「掘立小屋」は想像しにくいのだが，彼の次の証言から，出入り口が二つあったと考えられる。これは，血まみれの弟を見つけた時の様子である。

> わたくしはびっくりいたして，手に持っていた竹の皮包や何かを，そこへおっぽり出して，傍へ往って『どうしたどうした』と申しました。

入り口が一つだったとすると，表口の戸が閉まっていた事実と，この証言が矛盾してしまう。取調べの中でこの重大な矛盾が見過ごされるはずがないから，家には二つの出入り口があり，彼の証言には矛盾がなかったと考えるべきだろう。

つまり，何らかの理由から，喜助は表口の戸を締め切りにして裏口から出入りをし，婆さんも「留守の間」，それに合わせて裏口から出入りしていたことになる。だとすると，ここで一つの疑問が生まれる。それまで裏口から出入りしていた婆さんが，この時に限って表口から，しかも，閉めておいた戸をわざわざ開けて入ったのは，なぜだろう。弟の異変に気づいた喜助は裏口から駆け込んだのだから，この時，裏口の戸は開いていたはずである。

婆さんに関する疑問はこれだけではない。婆さんの登場するタイミングが，あまりにも良すぎるのだ。彼女は「留守の間」の世話を頼まれていたのだから，本来なら，喜助の帰宅時間帯に来ることはない。この日の帰宅について喜助は，「或る日いつものように何心なく帰って見ますと」と言っているから，帰宅時間に変更はなかった。そして，彼女に喜助宅を訪れるべき特別な用事，届け物や伝言のようなものがあった様子もない。さらに，彼女が一言の挨拶もなしに，いきなり戸を開けて入ってきたことも引っかかる。彼女は，何のために喜助宅を訪ねたのか。そして，訪問のこのタイミングは偶然だったのだろうか。

しかし，それ以上に分からないのが，彼女の的確すぎる観察力と洞察力である。家の中にいた喜助が，「もうだいぶ内のなかが暗くなっていました」と言うくらいだから，外から入った彼女には，家の中はほとんど真っ暗に見えたに違いない。にもかかわらず，彼女は短時間のうちに，喜助が弟を刺したこと

を理解しているのである。

真っ暗な家の中で，布団の上の血や，喜助が剃刀を握っていることが，よく分かったものである。仮に，それらの事実が確認できたとしても，喜助が弟を刺したという事態が，すぐに分かるはずがない。弟は病気で寝込んでいたのだから，喜助の様子が少々不自然だったとしても，弟を看病していると想像するのが普通だろう。百歩譲って，彼女がただならぬ雰囲気を感じ取ったとしても，何一つ問いたださずに，喜助の弟殺しを確信してしまうのは，やはり納得がいかない。

婆さんの行動は，謎だらけのようにも見えるが，一つの仮説を立てることで，これらの謎は全て説明できてしまう。

婆さんは，喜助が弟に危害を加えていると予想した上で家に入った。家の中で，刃物らしきものを持った喜助が弟にのしかかっているのを確認して，喜助が弟を切りつけたのだと確信した。

このように仮定しない限り，彼女の不自然な行動は説明できないと思うが，この仮説に対して，〈外にいた婆さんにそんな予想が立つはずがない〉という反論が出るかもしれない。しかし，中から聞こえてくる音で，家の中の様子が分かることはいくらでもある。掘っ立て小屋のような家なら，中の音は全て外に漏れるだろう。兄弟のやりとり，弟の悲鳴，争うような物音。たとえばそんな音が聞こえてくれば，中で何が行われているのか，おおよその見当がついたとしても不思議はない。

ところで，喜助と弟の仲は良かったのだろうか。喜助の話からは，仲のよい兄弟しか想像できないが，これはあくまで喜助の話から作られたイメージである。実際のところは，どうだったのだろう。喜助は，婆さんに「留守の間，弟に薬を飲ませたり何かしてくれるよう」頼んでおいたそうである。弟にどんな薬を飲ませていたのか分からないが，喜助にとって，弟の薬代がかなりの負担であったことは，間違いないだろう。喜助の言葉からは，状態の悪い時だけでなく，毎日薬を飲んでいたと推測できるからである。弟が病気になって半年。稼ぎがなく薬代ばかりかかることで，兄弟の仲が険悪になっていった，あるいは，治る見込みのない弟に，喜助が殺意を抱くようになった，という想像はそれほど強引なものだろうか。

仮に，兄弟の間にしばしば諍いがあり，婆さんが兄弟の仲を心配していたとしたら，弟の叫び声から喜助の犯罪を直感しても少しも不思議ではない。もちろん，兄弟仲の悪化は百パーセントの想像だが，彼女の迅速すぎる判断と行動は，このような可能性が高かったことを匂わせる。

ここで唐突な質問を一つしてみよう。弟はどうして喉笛を切ったのだろう。硬い骨の突き出た男の声帯は，喉の中では一番切りにくそうな場所である。喉を切るなら短刀で一突き，剃刀ならば頸動脈を切ると，昔から自害のための場所と道具は決まっている。少しでも楽に死にたいと思うなら，喉笛は一番避けたい場所なのではないか。剃刀で喉笛を切るという自殺方法に，納得できる説明を見つけることができるだろうか。

一方，喜助が弟を殺害したと仮定するなら，喉笛が選ばれた理由は簡単である。それは弟の声を封じるためだ。

この事件で次の二点は確実である。弟と喜助が争った形跡はない。弟は布団の上で喉笛を切られて絶命した。ここから次のような状況が推理できる。

喜助は自殺にみせかけて弟を殺害しようと思い，眠っている弟の喉笛を剃刀で切った。しかし，硬い喉笛は思ったように切ることができず，目を覚ました弟が暴れ出した。

喜助は話の中で，傷口の様子に妙にこだわっていたが，弟が抵抗したと考えると，喜助がここにこだわった理由も分かる。喉の傷について喜助が話している二箇所を引用しよう。

なんでも右の手に剃刀を持って，横に笛を切ったが，それでは死に切れなかったので，そのまま剃刀を，剖るように深く突っ込んだものと見えます。

真直に抜こうと云うだけの用心はいたしましたが，どうも抜いた時の手応は，今まで切れていなかった所を切ったように思われました。刃が外の方へ向いていましたから，外の方が切れたのでございましょう。

喉の傷は一直線ではなく，いろいろな方向に乱れていた。喜助は，傷口に乱れが発生した理由を一生懸命説明していたのである。傷口が乱れた本当の理由，すなわち，弟の抵抗を隠すためである。

また，弟はうつぶせに寝ていた。うつぶせなら，

剃刀を持つ自分の右手と弟の右手は同じ側に来る。「なんでも右の手に剃刀を持って」と，右手にこだわっているのは，喜助自身が左右を考えていたからではないか。

しかし，抵抗したといっても，所詮は病で寝たきりの体である。弟は，ろくな抵抗もできず，布団に押さえつけられたまま息絶えた。この時，弟は叫び声をあげたのだろう。しかし，声帯を切られつつあったために，その声は異様であり，しかも不自然に途絶えてしまう。

おそらく，婆さんはその声を聞いたのである。彼女が家に近づいてみると，中からは争うような激しい物音が聞こえる。ただ事でないと直感した婆さんは，最悪の事態を予想した上で，表口の戸を開けて中の様子を窺ってみる。暗くてよく見えないので，家の中に入ってみると，弟にのしかかるようにしている喜助が，刃物らしきものを握っていた……。

このように考えると，この時だけ婆さんが表口から入った理由も説明できる。それは緊急性だ。急いで入ろうとする時に裏口は不向きなのだろう。もちろん，その具体的な理由は分からないが，遠回りになるとか，足場が悪いとかいった事情が，裏口にはあったのではないだろうか。

以上が，喜助の話から推理できる〈弟殺し〉の〈真相〉である。もちろん，兄弟の間にどのようなわだかまりがあったかは，知る由もない。また，婆さんが，取り調べの際に，喜助をかばった理由，すなわち，弟の悲鳴のことを話さなかった理由も分からない。確実に言えることは，庄兵衛はもちろん，お奉行を含めた役人全員が，喜助の作り話に見事にだまされたということである。

なお，ここでは，喜助の話は奉行所での証言と同じ内容である，という前提で推理をしてきた。あるいは，この前提に対する反論を考えた読者がいるかもしれない。しかし，庄兵衛は奉行所の役人なのだから，喜助は同じ話を繰り返したと考えるべきだろう。喜助の話はお奉行に信用されているのだから，あえてそれを変える必要もない。

喜助は何が嬉しかったのか

先ほど，高瀬舟の上で喜助が不自然な笑顔を見せていることを指摘した。〈弟殺し〉の〈真相〉が分かれば，この笑顔の理由も明らかになる。その部分をもう一度引用してみよう。

> それは喜助の顔が縦から見ても，横から見ても，いかにも楽しそうで，若し役人に対する気兼がなかったなら，口笛を吹きはじめるとか，鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。（中略）この男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗ったような顔をしている。

江戸時代の刑罰は厳しく，殺人犯は通常なら死刑であるが，誤って相手を殺したような場合には，罪を減じて島流しにされた。『高瀬舟』のはじめのところに，「高瀬舟に乗る罪人の過半は，所謂心得違のために，想わぬ科を犯した人であった。」とあるのは，これを指している。つまり，本来ならば死刑になるところを，お奉行が作り話を信じてくれたお陰で，喜助は命拾いをしたのである。弟を残忍な方法で殺害した喜助にすれば，〈してやったり〉というところだろうから，島流しの舟上で笑顔が出てしまうのも無理はない。

先ほど，喜助の不気味さのとどめとして，「喜助はにっこり笑った。」という箇所をあげた。この不自然な笑いの理由も，この〈真相〉から説明できる。その箇所を引用してみよう。

> 暫くして，庄兵衛はこらえ切れなくなって呼び掛けた。「喜助。お前何を思っているのか」「はい」と云ってあたりを見廻した喜助は，何事をかお役人に見咎められたのではないかと気遣うらしく，居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺った。
>
> 庄兵衛は自分が突然問を発した動機を説明して，役目を離れた応対を求める分疏をしなくてはならぬように感じた。
>
> （中略：島に行くのを少しも苦にしていないように見えるのでそれを不思議に思った，という，質問の意図を庄兵衛が丁寧に説明する。）
>
> 喜助はにっこり笑った。「御親切に仰やって下すって，難有うございます。（後略）」

ここでは喜助の態度の変化に注目して欲しい。「喜助。お前何を思っているのか」と聞かれただけで，彼は「居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺」っていたのに，庄兵衛の真意を知った後では，「にっこり笑」ってみせる。どちらもオーバーな反応のように見えるが，これは，何かを隠している時に特有の反応ではないだろうか。重大な事実を隠している人間にとって，「お前何を思っているのか」という曖昧

な問いは不気味であり，嘘がばれたのではないかと緊張するだろう。そして，疑われていないと分かった瞬間，緊張は安堵に変わる。突然の大きな安堵が，思わぬ笑顔を作ってしまうことはあり得ることだ。何しろ，喜助の場合は自分の命がかかっているのだから，安堵感も格別のはずだ。「にっこり笑った」という特別な笑顔が出ても不思議ではない。そして，この素直すぎる笑いには，護送の役人が扱いやすそうだという，優越感にも似た安心感が，加わっていたかもしれない。

喜助の場違いな笑顔は，決して異常さから出たものではない。自分の話術で命拾いができた喜びと満足感から，自然に出てきた笑いだったのである。

まとめ

『高瀬舟』を合理的に読むとこのようになるが，もちろん，鴎外がこんな〈真相〉を意図したはずはない。このように書くと，作者の意図しなかった読みを考えることに，果たして意味があるのか，という批判が出るかもしれない。

そのような疑問に対して，私は次の質問をぶつけてみたい。作者の意図は，客観的なものとして存在するのだろうか。作者の意図通りの読みと，意図から外れた読みを区別することができるだろうか。

作品は，発表された瞬間に作者の手を離れ，独立した存在になる。作品は作者の意図を直接伝えることはできない。作品が伝えるのは，〈何が書いてあるか〉，そして，〈どのように書かかれているか〉である。私が本稿で行ったのは，『高瀬舟』に何に書かれていることの追究である。

鴎外は，人物造形に甘さがあり，さらに，饒舌に流れる傾向のある作家である。事件を人物が支えきれていないと感じる作品も珍しくない。『高瀬舟』は，この悪癖が極端に強く現れて，ある種の〈結晶作用〉を起こしてしまった作品と言えるだろう。

ただし，私は偶然現れた〈結晶作用〉よりも，これだけ欠陥だらけの作品が，今日まで不動の地位を確保してきた事実の方が，むしろ興味深い。この作品が発表されたのは大正五年。鴎外の代表作という名声に加えて，国語教科書への収録があるから，これまでの読者は述べで数百万人，あるいはそれ以上になるかもしれない。

読者がいかにごまかされてしまうか，『高瀬舟』はその壮大な実例と言えるだろう。

付記　本稿は，広島大学部局長裁量経費（リサーチ・オフィス経費）の一環として行われた平成21年度教育学研究科共同研究プロジェクト「日本語教育を起点とする総合人間科学の創出」（代表者：迫田久美子）による研究成果の一部である。